

○大西隆会長からのメッセージ

日本学術会議では、4月2-4日に第164回総会を開催しました。1日目には山本一太科学技術政策担当大臣にお越し頂き、ご挨拶を頂戴しました。山本大臣は、沖縄及び北方対策担当等、兼務されているテーマも多いのですが、就任以来科学技術政策には特に力を入れていらっしゃると思います。私も議員を務めている総合科学技術会議の大臣・有識者議員会合には、毎週のように出席し、自ら議論をリードする場面も度々あります。また総理を議長とする本会議も3月以来、既に2回開催されており、現内閣が科学技術政策を重視している姿勢が伺えます。まさに、学術会議も提言等の発信力を強め、政策に反映させていく好機であると言えます。

総会2日目には、2008年にノーベル物理学賞を受賞した益川敏英先生に特別講演をして頂きました。益川先生は「現代社会と科学」という演題で、会員との質疑応答を含めて約1時間にわたって話をされました。ユーモア溢れる語り口で、科学者の社会との関わりや科学と研究資金等の話題にも立ち入って頂きました。科学者が自分の仕事を大事にしながらも、様々な人や組織と触れ合うことで刺激を受けることも重要であると指摘されたのが印象に残りました。

総会でお二人のお話を伺い、他の報告を聴きながら、日本学術会議の活動目的について考えていました。何をいまさら。科学の向上発達を図ることと、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させることが目的と、日本学術会議法にも書いてあるではないか、と言われればその通りですが、時代とともに強弱があるように思えるからです。前段の「科学の向上発達」を図るには、言うまでもなく研究を通じて成果を出さなければなりません。研究施設・設備、スタッフの充実も必要です。このことは、まさに科学技術予算の増大や使いやすさという質的改善を求めることに繋がります。いわば科学研究にどれだけの人、物、金を投入するのかという入口を充実させるための目的です。

他方で、「行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透」させるには、科学研究の成果を広く社会の様々な分野に活用していくことが必要です。科学研究のテーマが直接工業製品に応用される場合もあれば、科学的知見が行政や国民の思考や行動に影響を与えるという場合もあるでしょう。要するに、科学技術の出口を充実させる観点から生じる目的と言ってよいと思います。

こうして見ると、法律では、日本学術会議の目的は科学研究の入口と出口の両面から書き分けられていることが分かります。私は敢えて、今日では出口、すなわち科学研究の成果を社会で十分に活用することを日本学術会議は重視するべきではないかと言いたいのです。もちろん、直ぐに役に立ちそうな科学研究だけではだめだとか、出口指向では結局は基礎研究が疎かにされるという批判があることは承知しています。しかし、日本のように、毎年5兆円前後という巨額の税金が科学技術関連に投じられている国では、更に資金を増やしたり、質を改善することを怠ってはならないとしても、それ以上に科学研究がどのように社会に有用であるかを不断に示すことに科学者はもっと熱心になる必要があります。現在実施されている科学技術基本計画は、科学技術イノベーション政策という言葉 키워ドにしていますが、このイノベーションがまさにこの点を含意しています。もちろん、日本学術会議は、会員多数の合意に基づく独自の視点で、しかし社会に有用な科学のあり方を目指して今期の残りの活動を推進していきたいと考えます。